

って、あの子どもたちは、地震発生後直ちに学校裏手の丘に登り始めた。彼らは、ハザードマップに赤く塗られた津波危険地域を信じず、地図によると安全なはずの学校の指定した避難所も危ないと判断してさらに高い所に登った。学校指定の所で留まっていたら、みな津波にさらわれたと思われる。さらに、こうした中学生の行動を見て近くの小学生たちも彼らに従って丘を登り始め、こういう子どもたちの群れを目撃して、その住民も「齊に高い所に避難した」みんなAに基づいて行動し、全員助かったのである。

これと反対に、少なからぬ学校では、児童生徒たちを校庭で並ばせているあいだに、児童生徒数を確認しているあいだに津波に吞まれるという悲劇が生じた。その一例として、ある保育園では地震から四〇分後に園児を乗せたバスが発車したが、たちまち津波に吞まれて数人の園児が犠牲になった。わが子を失った若い父親は「あれほどの地震が起これば津波が来るということはわかっているはずなのに！」と、保育園側の遅い対応に身を震わせていた。防災無線やラジオが機能しなかったから、など保育園側の挙げる理由は成立しない。正確な情報や公的な放送を信じてではなく、これまでのありつたけの自分の経験に基づいて、とっさに行動すべきなのだ。先生方の頭には全児童生徒を「みんな一緒に」避難させなければならぬという固定観念がこびりついていたのであるが、これは間違いである。一秒でも早く行動に出ること、一人でも多くの児童生徒を避難させることを目指さねばならない。

俳優の岸恵子は子どものころの戦争体験を幾度も語っている。ある日、「子どもは全員この防空壕に入れ」という大人の指示があったが、彼女はとっさにここは危ないと直感してひとり防空壕を飛び出した。やがて振り返ると、その防空壕めがけて空から爆弾が降り注ぎ子どもたちは全員殺されたのである。権威を信じない精神はこのとき自分のうちに形成された、と彼女は毅然として言う。

だが、もちろん反対のこともある。防空壕に残った子どもたちは全員無事であり、そこを抜け出した彼女だけ爆弾に身体を引き裂かれて死ぬこともありえよう。だが、それでも、そのすべては自分の判断であって、他の誰も責めなくていいのだから、潔いではないか。権威を妄信する者に限って、あとで我が身に損益が生ずると、「権威に騙された」と呟くのだ。自分は戦争を引き起こした政治家や軍人に騙されたのであり、かつての津波情報に基づいて避難警報を發した市役所や村役場の役人たちに騙されたのである。^④ そうであつてはなるまい。「自分で」判断して行動することには、自己責任を引き受ける覚悟が伴わねばならない。権威を信頼し、あとで騙されたと訴えて責任を回避する態度から脱出しなければならぬ。

(中島義道『反(絆)論』)

(注) 食傷||同じことにはしばしば接していやになること。

ハザードマップ||災害予測地図。

毅然||意志が強く、物事に動ぜずしっかりしているさま。

損益||損失や利益。

問一 傍線部①「かつての経験に基づいた情報」とは具体的にはどういう情報か。本文中より五字以上十字以内で二つ抜き出し、答えよ。

問二 空欄Aに入る適当な言葉を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 津波警報
- イ 中学生の行動
- ウ 自分たちの判断
- エ 津波避難訓練の経験
- オ 日本人としての常識

問三 傍線部②「児童生徒たちをく悲劇が生じた」とあるが、筆者はなぜこのような悲劇が生じたと考えているか。解答欄に合うように本文中より五十字以内で抜き出し、その最初と最後の五字を答えよ。

問四 波線部イ「生徒たち」、波線部ロ「俳優の岸恵子」の行動において共通する点を考え、解答欄に合うように説明せよ。

問五 傍線部③「潔い」とあるが、筆者はどのような態度を「潔い」と感じているのか。説明せよ。

問六 傍線部④「そうであつてはなるまい」とあるが、筆者はどうであつてはなるまいと述べているのか。解答欄に合うように本文中より三十字以内で抜き出し、答えよ。

問七 本文の内容として適当なものを次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

- ア 日本人の常識では、ほかの人の言うことに惑わされず、自分の判断で行動することが安全で確かなことである。
- イ 学校が指定した避難所に避難しても、命は助からなかったであろうから、防災のための準備はあまり意味がない。
- ウ 災害が起こったとき、日頃避難訓練を受けていた中学生の行動がお手本となって、地域の小学生も大人も救われた。
- エ 保育園の対応の遅れは、防災無線やラジオが機能しなかったせいにはできないが、どうしようもないことだった。
- オ 岸恵子は指示に従わずに防空壕を飛び出し結果的に助かったが、それは一歩間違えば死ぬ可能性もある危険な行動だった。
- カ 津波でも戦争でも、避難警報や公式の情報などを信じて行動すれば騙されるものだから、他人は信頼できない。

四 次の1～4の傍線部の片仮名を漢字に直せ。

- 1 明るくてホガらかな人。
- 2 図書館から本をカ^リリた。
- 3 病気に苦しむ人をカンゴ^ゴする。
- 4 新しい製品をセンデン^ンする。

問題は全4の3につづく。

⑤ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「私」は小学四年の女の子。六月に都会から引越してきたばかりで、田舎での生活に戸惑っていた。転校先のクラスでは、オケラという昆虫を使った遊びが流行していた。私は、新しいクラスにほんとうになじむために、自分もオケラ遊びに参加した。

勝負の終わったオケラをヤクルトの容器に戻し、ガーゼの蓋をかぶせて輪ゴムをはめようとしたところで、ウオーという、うなるような男子の音が聞こえてきた。

「オケラが逃げたー」

声のした方に振り向いてみると、みな床にしゃがんで逃げたオケラを捜していた。

えー、誰のおー？ どっち？ どこいったと？ えー踏んじやうよう、キヤー、などという声が入り乱れ、教室は騒然となった。

そのとき、教室の引き戸が引かれ、福原先生が入ってきた。

「なにごと!？」

福原先生は、教卓に闇魔帳と呼ばれている黒い帳面を置きながら大きな声で言った。

「オケラでーす」

誰かが高い声をあげた。

「泰くんのオケラが逃げたので、みんなで捜してるんです」

春江ちゃんが立ち上がって、先生をまっすぐに見つめながら言った。泰くんは床によつんばいになってオケラを捜している。

「おったー!」

泰くんが大きな声を上げて、腕をのぼした。

「じゃあ、泰くん、それをすぐにしらべて。みんなも早く席につきなさい」

みんな興奮していてざわついたままだったので、先生は叫ぶようにそう言って、腕組みをして教室が落ちつくのを待った。先生が眉間にしわを寄せたまま、押し黙っていることに気づいた生徒たちは、椅子に座ったまま、やがてしんとしずまりかえった。

「みんながそのヤクルトの中に、オケラを入れて持ってきていることは知っています。それで楽しく遊んでいることも、知っていました」

先生は、ふうつと溜息をついて、教室を軽く見わたした。

「オケラで遊ぶの、楽しかった?」

先生は泰くんの顔を見ながら言った。

「あ、はい……。楽しかったとです」

「そう……。君たちが楽しく遊んでいることを、邪魔するつもりはないけれど、指でつまんで遊んでるそれは、なんだと思う?」

先生は、もう一度泰くんを見た。泰くんは肩をすくめてうつむいたまま、オケラは、虫です、と答えた。

③ 「虫は、おもちゃと同じかな?」

先生は、低い声でそう言ったあと、しずまりかえった教室に、ちがうよね、と続けた。

「君たちがもしオケラだったとして、自分の家の中の土から突然引きずり出されて、なんだかよくわからない狭い場所に閉じ込められて、また突然引き出されてお腹を押されて、なんてされたらどんな気持ちになるか、一度目を閉じて想像してみてください」

私は言われた通り目を閉じて、オケラになったつもりになった。巨大な二本の太い棒のような指が、迫ってくる。逃げ場もないままつかまり、ぽと、とうす暗い場所に突然落とされてしまう。砂がある。壁はつるつるしていて這い上がれない。見たこともない砂の中にもぐっていくしかない。ああ、なんだか辛い。

④ 教室中が神妙な雰囲気になった。

「さっきの泰くんのように、教室に逃がしてしまったら、誰かに踏まれて死んでしまうかもしれません。一度死んでしまったらもう二度と生き返れないのは、みなさんも知っていますね?」

はい、という返事がざわざわと広がった。

「オケラは、小さな、弱い虫です。ここに連れてこられただけでひどく疲れきっています。みんなにつまみ出されているうちに死んでしまうかもしれません。オケラは、本来自然の中で生きる生き物です。ここは学校です。人間の子どもたちが勉強をするところです。虫を使って遊ぶ場ではありません。これからは、オケラを学校に持ち込んで遊んではいけません。いいですね」

えー、という残念そうな声に、はーいという声がかぶさった。私は、机の上に置いた、デビューしたばかりのオケラ入りのヤクルトを見た。デビュー戦で敗退。以後試合できず、か。と思ったけれど、なんとなくほっとした気もする。

⑤ 「先生」

公太くんが手を上げて立ち上がった。

「学校に持ってこんかったら、よかですか? 外でなら試合しても、よかですか?」

先生は、そうねえ、と少し考えてから、続けた。

「学校の外で君たちがどんなふう遊ぶかについては、先生には、基本的になにも言えません。でも、オケラに接するときは、オケラの気持ちをいつも考えておくようにして、とお願ひしておきます」

「オケラに気持ちって、あるとか」

美くんと幸夫くんが、ひそひそと話した。しかし先生にはしつかり聞こえたらしい。

「オケラにも、気持ちはあります。犬にも猫にも、虫にも花にも、気持ちはあるのです。言葉が使えなくても、生きているものにはみーんな、気持ちはあるんです」

そう言い終えると、福原先生は、闇魔帳をふたたび抱えて、教室の戸をガラガラと引いた。

「今からみんなで、その子たちを自然に返してあげにいきましょう」

福原先生は聞く耳を持たない、といった雰囲気ですつさと戸を開けて廊下に出ていった。先生の有無を言わさぬ雰囲気は圧倒されたように、みな大人しくオケラ入りヤクルトを握って先生に従った。

それから、それぞれがオケラを捕まえた場所まで、近い場所から順にみんなでぞろぞろついていった。校庭のすみ、空き地、庭、公園、畑、山の中など、ぐるぐると移動して、オケラを放った。

私の番がめぐってきて、土の上に置いた私のオケラは、しばらくなにが起こったかわからない、というふうに動きを止めたが、そのうちにもぞもぞと動きはじめ、土の間に入りこんで見えなくなった。私の初めてのペット。なんて短い間の。オケラには、辛い思いをさせてしまっていたのかなあ。ごめんよ。そういえば、名前もつけ

てあげてなかった。

「あらあ、みなさんおそろいで。お散歩かしら？」

サロペット姿のおハルさんだった。

「あー、おハルさんだあ。おハルさん」

あつという間におハルさんは子どもたちに囲まれてしまった。すごい、人気者なんだな。あつけに取られて、その輪の中には入れないまま、もじもじしてしまった。と、おハルさんと目が合った。とたんに目尻めじりにたくさんのしわを寄せて、おハルさんがにっこり笑ってくれた。なんてかわいい笑顔なんだろう、とドキドキした。

「子どもたちが学校に持ってきたオケラを、もといいた場所に返すためのお散歩なんですよ」

福原先生がそう説明すると、おハルさんは、あらあ、それは、すてきなことですねえ、と目を見開いた。ひとみ瞳に太陽の光が入り、透すき通った。

「ねえ、おハルさんち、また遊びにいつてよかですか？」

春江ちゃんが言うと、おハルさんはもちろん、と即答そくとうした。オレも行くー、あたしもー、という声が続々に起こった。私もそつその声に参加した。おハルさんは、その声の一つひとつ応えるようにうなずいたあと、じゃあみなさん、またね、と手を振って去った。

そうしてすべてのオケラを自然に返して、みんなで教室に戻ったときには、お昼が近かった。⑦みな空になったヤクルトの容器を手に持って、なんだかはればれとした顔をしていた。

(東直子『いとこの森の家』)

(注) サロペット＝畑仕事などで汚れる場合に着る仕事着。

「おハルさん」は、近所の森に一人で住んでいるおばあさん。

問一 傍線部①「先生をまっすぐに見つめながら言った」とあるが、

この時の春江ちゃんの様子の説明として適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 悪いことをしていたところを先生に見つかってしまい、怒られないようにとつさに身構えている様子。

イ 悪いことをしたという意識はあるが、突然怒り出した先生に對して開き直っている様子。

ウ 悪いことをしていないのに先生が問い詰めたので、抗議している様子。

エ 悪いことをしているという意識はまったくなく、ほんとうのことを正直に言っている様子。

オ 子どもたちがせっかくなか楽しんでいたのに、それを台無しにしてしまった先生を責めている様子。

問二 傍線部②「やがてしんとしずまりかえった」とあるが、この時のみんなの気持ちとして適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 先生がおもしろくなさそうにしている様子を見て、せっかくの楽しみを台無しにされたことを残念に思う気持ち。

イ 先生が不機嫌そうな様子を見て、なぜなのかわからず戸惑っている気持ち。

ウ 先生が心配している様子を見て、ふざけすぎていた自分たちが悪かったと反省する気持ち。

エ 先生が悲しんでいる様子を見て、きまりを守らなかったこと

を申し訳なく思う気持ち。

オ 先生が怒っている様子を見て、この後どうなるのか不安になっている気持ち。

問三 傍線部③「虫は、おもちゃと同じかな？」とあるが、ここで先生が言いたかったことはどういうことか。それを説明した次の文の空欄 a・b を埋めよ。

虫は、a ので、おもちゃとは違う。だから、b ということ。

問四 傍線部④「教室中が神しんみょう妙な雰囲気になった」とあるが、なぜこのようになったのか。その理由をわかりやすく説明せよ。

問五 傍線部⑤「なんとなくほっとした気もする」とあるが、この時の私の気持ちを、わかりやすく説明せよ。

問六 傍線部⑥「おハルさんは、あらあ、それは、すてきなことですねえ、と目を見開いた」とあるが、この時のおハルさんの気持ちをわかりやすく説明せよ。

問七 傍線部⑦「みな空からになったヤクルトの容器を手に持って、なんだかはればれとした顔をしていた」とあるが、なぜ「はればれとした顔をしていた」のか。その理由として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア もうオケラで勝負することもなくなり、勝ち負けを気にすることから解放されたから。

イ おハルさんが、オケラを自然に返しに行くことを喜んでくれたので、正しいことをしていると感じてうれしかったから。

ウ 本当はオケラを自然に返すことはしたくなかった、という残念な気持ちを先生の前では隠しておきたかったから。

エ もう学校にオケラを持っていくこともなくなり、普通の学校生活に戻ってくると安心したから。

オ 先生とのわだかまりもなくなり、新たな気持ちで学校生活に臨のぞもうと希望を持ったから。

問八 本文の内容と表現の説明として誤っているものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 子どもたちの会話に方言がたくさん出てくることで、私が新しい友達ともだちの輪になかなか入れず、寂しさを感じていることを暗示している。

イ 子どもたちが、オケラを自然に返すという体験を通して、先生が自分たちにつたえたかったことを次第に理解していく様子が描かれている。

ウ 自由奔放ほんぼうで活発に行動している子どもたちの姿を通して、田舎で自然とふれあいながらのびのびと成長している様子が描かれている。

エ 都会から引越してきたばかりの私から見た、新鮮な田舎での学校生活の様子が、生き生きとした子どもたちの姿を通して描かれている。

オ 子どもたちと先生やおハルさんとの、遠慮や隠しごとのない会話を通して、田舎ののんびりした生活に私になじんでいくことを暗示している。

